

S・サンダールーフォルグ著

ギータゴウヴィンダ

——カーウィヤに於ける伝統と刷新——

原 實

十二世紀、ベンガルのラクシュマナセーナ王の宮廷詩人として名を馳せ、「王の五宝の一」と謳われたジャヤデーヴァの手に成る抒情詩、ギータゴウヴィンダはサンスクリット文学史上に特異な光彩を放っている⁽¹⁾。詩としての美しさと、内容への興味から本書は夙にウイリヤム・ジョーンズ卿の手によって一七九二年英訳され、十八世紀に西洋に紹介された数少ないサンスクリット古典文学の一に数えられる。ドイツの詩人ゲーテも訳文を通して本書に接し、その感慨の一端をシラーに宛てた書簡の中に洩らしている。本邦にあつては田中於菟弥氏が本書を抄訳し、懇切な解説を付して紹介した⁽²⁾。

ギータゴウヴィンダは横笛を手にするクリシュナと牛飼いの牧女ラーダーの恋の織り成すあやを、邂逅、別離、再

批評と紹介 原

会といった劇的場面の設定のもとに、時に悲しく、又時に官能的に歌い上げた抒情詩であるが、同時にそれはヴィシュヌ神の化身クリシュナへの篤信の信者の宗教的心情の吐露でもあった。愛に於ける女性の献身の中に、信者の神への思慕と投入を見、男女の合歡に神人の感応道交をみようとする、タントリズムに彩られた宗教的抒情詩として、それはベンガルのヴィシュヌ教徒の間で就中愛好せられた。形式的にみてもそれは戯曲と抒情詩の両面をそなえた一種のメロドラマで、主人公クリシュナ、女主人公ラーダー、それに彼女の女友達の三者が登場人物となつて現われ、筋は極めて劇的に進行して行く。

内容、形式に於いてのみならず、それはまた構成の上からみても極めて特徴的である。全篇は古典カーウィヤの伝統に従つて十二の章（サルガ）に分れるが、それは更にアラバンダと称する別種の分類基準によつて二十四節に細分されている。前者の分類線上の叙唱詩節（ヴリッタ）は古典修辭学の伝統に従っているが、各アラバンダに盛られる部分は旋律（ラーガ）と拍子（タール）の指示に従つて歌われるように仕組まれ、量句（ドルババダ）を結句に擁し、脚韻を伴つて明らかに歌謡としての音楽的效果を意図している。

この、内容、形式、構成にわたる本書の特異性は近年改

めて学者の注意を喚起し、欧米に四人の学者が期せずして略々同時（一九七七—七八）に研究を発表するところとなった。³ それぞれ、異った視点に立った特徴ある研究で、作者及び作品に関する重要な貢献であるが、この中より敢えてここにフォルク女史の研究を取り上げて紹介する所以のものは、その言語に関する分析が他にみえず、女史の試みがたまたま筆者の興味を惹いた故に他ならない。

既述のように、ギータゴウヴィンダは詩節部と歌謡部より成り立っているが、この特徴ある構成の二重性について、果してこの両部分が載然と区別されるべきか、若し区別される場合にはそこは複数の作者を想定すべきか、古典修辭学の規矩に則る詩節部に問題はないとしても、それとはおおよそ不斉合にして、且つ他のサンスクリット詩作に例をみない歌謡部が元来サンスクリット語で綴られていたものか、或いはアブラランシヤ乃至古ベンガル語より翻案されたものでなかったか——この作品をめぐる古くから諸家の間に見解が分かれ、幾つかの仮設が提示された。しかし、これらの仮設の多くは推測の域を出でず、何人も曾ってこの問題を体系的に立証した者はなかった。この点に焦点をすえ、J. Bloch, L. Renou, S. K. Chatterjee, A. D. Mukherji⁴等、近代学者の研究を踏まえて、新しく論じたものがここに紹介せんとするフォルク女史の近著に他ならない。但し、

その所論は文献の典拠を明示しているとはいへ、必ずしも常に決定的とは称し難く、判断はおのづから読者に委ねられるが、ギータゴウヴィンダ解釈への一つの試みとして等閑に付されてよいものとも思われない。

本書は大別して三部分より成る。第一部は更に「言語」「韻律」「文学論的分析」の三章に分かれ、第二部はテキスト、第三部は索引（文献目録を含む）となるが、この中後二部については後述することとし、ここでは専ら第一部のみを解説する。

第一章「言語」は十七節より成り、音韻、名詞の複数表示法、代名詞、形容詞の比較級と最上級、準動詞（分詞、不定法等）、動詞の時制（現在、過去、未来）、法（願望法、命令法）等にわたってギータゴウヴィンダの詩節部と歌謡部の特徴が論じられる。

先ず音韻論に於いて著者は歌謡部が脚韻を踏んでいる事実に徴し、それぞれ対応位置に於ける歯擦音の単純化（一種類のs音）、rとl、nとn'との混同、帯気音の無気音化等の現象をとらえ、ここに東部インドの中世俗語の影響を見ようとする。複数表示にkadamba, kalapa等「多量集積」を意味する語を、名詞合成語の後肢に立てる迂言法は語尾による単複表示機能を後退させるが、これはとりも

なおさず古ベンガル語にみえる特徴に連なっている。同種の現象は形容詞の比較級、最上級の形にもみられる。著者は本書にみえる比較、最上級表示を精査し、それらが文章論的にみて極めて弛緩し、原級との区別が曖昧となつて、比較・最上の接尾辞が必ずしも本来の機能を果していない事実を指摘している。

未来受動分詞にも形容詞化が進み、絶対法にも副詞化が窺われて、ここにも俗語の影響が看取される。現在分詞もその受動形が稀となり、能動態現在分詞はしばしば物語風現在 (present naratif) の機能を帯び、歌謡部に就中絶対格 (locatif absolu) が現われて、近代インド・アリアン語の特徴を指差している。

次いで定動詞形についてみるに、先ず未来と願望法の後退が顯著で、直接法現在形、命令法がこれを補っている。周知の如くサンスクリット語には数多くの過去表示法があり、詩人達はそれらより選別して学を銜うが、詩人ジャヤデーヴァにはこの種の技巧的術学性が稀薄である。概して表出は単純明瞭で、過去分詞による過去表出は名詞構文化への傾向を示し、後期サンスクリットの特徴を示している。単純化の傾向は就中歌謡部に顯著で、著者はこの部分に時制には現在と過去の二、法には直接法と命令法の二のみが大勢を占めると結論している。後期サンスクリットの例に

洩れず、名詞起源の動詞 (denominatif) の進出が著しく、
P 語幹優勢化に拍車をかけた。

これら、本書にみられる後期サンスクリットの単純化の傾向はそのまま近代インド・アリアン語の特徴を反映しているが、他面、書き言葉としてのサンスクリットが、語彙の面で話し言葉を拘束し得ても、文章論の上では支配力を喪失し、後者は前者より急速に離れ行き、且つは又逆に前者に影響するといった言語史の実態を窺わしめるものがある。但し、この種の単純化を促進したものに脚韻、リズムへの顧慮のあつたことは否むべくもない事実で、この傾向は歌謡部に於いて就中明瞭に看取される。

第二章「韻律」は詩節部の韻律、アーリヤ頌（四頌のみを数える）、歌謡部の韻律に大別される。先ず詩節部韻律の項に於いて著者は、詩人ジャヤデーヴァが後期サンスクリット詩人に知られる韻律の中より十三種を用いていたことを明らかにし、それら韻律の使用頻度を明示して一目瞭然たらしめる。この事實は作者が古典サンスクリットの韻律に精通し、それらを自在に駆使し得た詩人であつたことを物語っているが、Sardulavikrīdīaを始めたこととする抒情詩向きの韻律や、音楽性豊かな Vasantatikā 等の頻度の多いことは本書の性格に徴して当然の勢いである。次いで歌謡部の韻律を扱う項では、それらがリズム、アクセントに特

徴を有していて、明らかに音楽性が優先していた事実を確かめた後に、二十四のプラバンダについて逐一検討が加えられ、更に脚韻に関して独立の一項を設けている。四音量を一脚とするガナ形式を原則としているこの歌謡部の韻律分析はインド音楽史研究に資するところが少なくないと思われるが、この分野に味い筆者は詳論を控えざるを得ない。唯、この部分の韻律は、ブラークリット、アパブランシヤのそれとは明らかに別系統に属し、十二世紀のベンガル地方に流布していたであろうと想像される民俗舞踊に合わせ歌われていた歌謡に拠っていたことは明らかで、著者はここにジャヤデーヴァの獨創性を見ようとしている。

第三章「文学論的分析」は五項より成る。ここで著者は本書がマハーカヴィイアの伝統の上に立って、一流詩人、批評家の読者を意識し、彼らの間での評価を期しつつも、他面、就中歌謡部にあつては、サンスクリット語の微細な味わいを解し得ない読者を予想し、一般の通俗性をも同時に意図していることを明示している。又、ここに扱われるクリシュナの愛も所詮は神の遊戯 (Kṛiṣṇa-līlā) として著者は捕え、最後に情趣の色彩論 (暗色―愛、白色―滑稽、赤色―忿怒) に言及している。但し、著者自らも認めているように(一一八頁、註69)、全体として西洋の修辭学の視点に拠っているため、古典インドの修辭学や戯曲論の専門

家には或る種の不満が残る。就中、第三章はカーマ・ストラや戯曲論との比較に於いて補足するべきところが多いように思われ、この部分はさき言及したL・シーゲルの方がより内容豊富であると評せざるを得ない。

以上が本書の約三分の二を占める謂わば「研究部」で、残余はテキストの校訂と索引に当てられている。この中、テキスト部はBombay, Bonn, Ahmedavad, Hyderabadより既に刊行されている四つのテキストを批判的に扱って校訂し、詩節部をラテン数字、歌謡部をアラビア数字で示してその区分を明瞭にしている。訳としては独立の部分を有しないが、既述の「研究部」の中に可成りの数の詩節、歌謡がフランス語訳されている。このテキストに続いてIndex verborumがあり、巻末は研究文献目録によつてしめくくられている。

但し、既に触れたように、このテキストと索引に関しては、本書刊行の一年後にアンリ・ケレの大著が現われて、フォルグ女史は、この部分に関する限り、ケレに取って替られた。ケレの著は極度に客観的な成果で、索引部は逆引き索引その他を完備し、より周到・徹底的なものとなり、研究文献の列挙もより組織的且つ網羅的となった。ケレも指摘する如く、フォルグのこの著は誤植が少なく、部分

的に素人嗅を脱し切れず、略々同時に刊行された他の三著によって補わるべき部分のあることは否み得ないが、ギータゴヴィンダの言語の特徴を明示した功績は評価されねばならない。その手がたい努力の導いた結論は又、詩人ジャヤデーヴァへの正しい評価に連っているように思われる。同女史の結論を要約して、以下に略述する。

「題材(クリシュナとラーダーの愛)といひ、韻律といひ、又言語といひ、詩人ジャヤデーヴァは彼の生きた十二世紀東インドの民衆に親しまれていたものを選び、人々の吟唱、舞踊に資することを目標としていた。しかし他面彼は又古来のサンスクリット詩作の伝統を重んじ、粹人(sahridaya)の嗜好に合ひ、通人(rasika)の批判に耐え得るものを残そうと努めた。この一見矛盾している二つの要素を自からの内に統一し、⁽⁶⁾ 伝統と刷新の両者を一身に体現しているところに彼の詩作の特徴がある」

この結論の前には、本書に複数の著者を想定すること及び、俗語からの翻案説は後退を余儀なくされるであろう。そしてこの結論に述べられたギータゴヴィンダの特徴こそ、本書の副題「カーヴィヤに於ける伝統と刷新」の意味するところであり、それは又詩人ジャヤデーヴァの名を今に伝えた所以であった。

註

- (1) 辻直四郎「サンスクリット文学史」(東京、岩波書店、昭和四八年) 一三三頁。
 - (2) 田中於菟彌「酔花集」(東京、春秋社、昭和四九年)、一五五—一八一頁。
 - (3) Barbara S. Miller, *Love Song of the Dark Lord, Jayadeva's Gitagovinda*, Columbia University Press (New York, 1977) 125 p.
 - L. Siegel, *Sacred and Profane Dimensions of Love in Indian Traditions as exemplified in the Gitagovinda of Jayadeva*, Oxford University Press (Delhi-London, 1978) 328 p.
 - Henri Quillet, *Le Gitagovinda de Jayadeva*, Texte, Concordance et Index, Georg Olms Verlag, (Hildesheim-New York, 1978) 570 p.
- 最初に掲げたものは、インド抒情詩の訳者として定評のあるミラー女史の書で、この中でも最も簡便ではあるが、序論部六十六頁は周到、豊富な註を含んで極めて有益である。特にジャヤデーヴァの後世の文献・碑文への言及(pp. 47-51)、「ラーダー信仰の歴史を文献に徴して検証した部分」(pp. 29ff.)は極めて要領よくまとめられている。

る。ただ筆者は本書の paperback edition のみは接し、その hardcover edition (p. xiii) を手にし得なかつたこととを遺憾とする。

より思想的立場に立って、本書を中心に愛の問題を論じたものゝ、第二のシーゲルの学位論文がある。この著はインド神話「戯曲論をよめるが、部分的に元長の嫌いなことになら。尚、この著には Marie-Claude Potcher 女史の書評がある (Journal Asiatique CCLXIX, 1981, pp. 508-510)。

ケンの大著は後述する如く、極めて客観的な学問的成果で、文献研究に利用度の最も高いものとならう。

(4) フォルゲ女史の依用する数多くの研究書「研究論文の中から、その頻度の極めて多いものを挙げれば次の通りである。

J. Bloch, *L'indo-aryen du Vêda aux temps modernes* (Paris, 1934) *Indo-aryen from the Vedas to Modern Times*, English edition largely revised by the author and translated by Alfred Master (Paris, 1965).

S. K. Chatterji, *The Origin and Development of the Bengali Language*, Vol. I-II (Calcutta, 1926).

A. D. Mukherji, "Lyric Metres in Jayadeva's Gītagovinda," *Journal of the Asiatic Society*, No. 384

(Calcutta, 1967).

L. Renou, *Grammaire sanscrite* (Paris, 1930). "Sur la structure du Kāvya," *Journal Asiatique* CCXLVII, (Paris, 1959). *Études de grammaire sanscrite*, 1 ;

Recherches sur l'emploi du participe (Paris, 1936).

(5) 例えば同女史の *bhava* の解釈 (pp. 31-32) に引く G. Buddruss は既に異議を挿入した。

Georg Buddruss, "Zum Gebrauch von *bhava*- und *bhava*- im späten Sanskrit," *Studien zur Indologie und Transitik* 4 (1978), pp. 81-110.

(9) 同類の二重性 (人の愛、神の愛) は照原の L. Siegel の著の研究対象とも (Sacred and Profane Dimensions of Love)。

(Stella Sandahl-Forgue, *Le Gītagovinda, tradition et innovation dans le Kāvya*, (Acta Universitatis Stockholmiensis 11), Almqvist & Wiksell International, Stockholm-Sweden, 1977. 275p.)